

(別紙1)

総括研究報告書

課題番号	2023C-24	
研究開発課題名	川崎病遠隔期における胸部単純 X 線検査の有用性の検討	
分類※	<input type="checkbox"/> ① <input type="checkbox"/> ② <input type="checkbox"/> ③ <input checked="" type="checkbox"/> ④ <input type="checkbox"/> ⑤ <input type="checkbox"/> ⑥ <input type="checkbox"/> ⑦	
区分	<input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input checked="" type="checkbox"/> C <input type="checkbox"/> E <input type="checkbox"/> S	
主任研究者	所属	国立成育医療研究センター 総合診療部
	役職	医員
	氏名	益田 博司
実施期間	2023年 4月 1日 ~ 2024年 3月 31日	

※分類は下記①～⑦より選択

- ① 日本の成育分野の疾患の研究の基盤となる研究
- ② 診断、治療及び予防法の開発に関する研究
- ③ 発症機序や病態の解明等を行う研究
- ④ 診断や治療のための基準の開発等に関する研究
- ⑤ 患児・者の QOL 向上に結びつく研究
- ⑥ 研究的視点や技術をもつ医療従事者を育てるための研究
(プロトコル作成のフェージビリティ研究)
- ⑦ 政策提言に結びつく研究

成果の概要

川崎病は小児に好発する全身性の血管炎であり、後遺症に冠動脈病変 (CAL) を合併することがある。冠動脈の炎症が強く、CAL が残存している症例では、稀ではあるが、経年と共に冠動脈が石灰化し血管自体が狭くなって、冠動脈内の狭窄を認める場合もある。この石灰化病変に関しては、CAL 合併例に対して、川崎病の遠隔期に胸部単純 X 線検査を撮像した際に得られた結果に基づいて作成された知見であり、CAL の認めない症例で、冠動脈の石灰化病変の有無を評価した大規模な報告はない。

川崎病遠隔期において、冠動脈の重症度分類 (①拡大変化なし②急性期一過性の拡大③退縮④冠動脈瘤の残存⑤冠動脈狭窄性病変) ごとに、胸部単純 X 線検査にて認められる冠動脈の石灰化病変の有無を調査し、胸部単純 X 線検査の有用性を評価する。

研究期間の 2008 年 4 月～2023 年 3 月の 15 年間に川崎病および川崎病疑いの計 2,398 例を対象とした。全体の約 7 割が発症 1 年以降に胸部レントゲン検査を実施していた。その中で、胸部単純 X 線検査にて、冠動脈の石灰化病変を認めたのは 2 例のみだった。川崎病遠隔期の冠動脈の重症度分類の石灰化病変の内訳は、①拡大変化なし：0 例、②急性期一過性の拡大：0 例、③退縮：0 例、④冠動脈瘤の残存：1 例、⑤冠動脈狭窄性病変：1 例だった。石灰化病変を認めた 2 例は、それぞれ 3 歳 11 か月時、4 歳 3 か月時に川崎病を発症し、後遺症を多枝病変に認め

ており、うち1枝は冠動脈内径が8mm以上の巨大冠動脈瘤を有していた。石灰化病変が初めて指摘された時期は、発症7年6か月後および発症3年11か月後だった。

いくつかのlimitationは存在するが、川崎病遠隔期において、CALの後遺症がない症例では胸部単純X線検査で、冠動脈石灰化病変を認めなかった。大規模な症例数で、本結果を得られたことで、研究の目標を達成することができた。本研究結果は、第128回日本小児科学会学術集会で報告予定である。